

御先祖記 四

御先祖記四 自慶長五年十九年^甲巳歲至

一 慶長五年^子七月、石田治部少輔三成上方にて謀叛仕に付て会津上杉景勝御退治をは先被指置江戸へ御歸陣の時、去年常州佐竹に御預被置候土方勘兵衛雅朝を被召出、汝八加賀国へ罷越前田肥前守利長に急人数を可出由申候へとて被遣、又大野修理治長をも岩城より被召出大野ありかたく存御供仕る

一 真田安房守か二男左衛門佐八大谷刑部か縁者也、夫のミならず日頃石田治部少と念頃成けれ八御暇を申居城に歸嫡男伊豆守八父に同意不仕、子細八常々家康公御自被下其上本多中務大輔忠勝か縁者にて候故也、安房守申ける八昔より親子兄弟敵味方と成事例なきかにもあらず、汝八関東へ立越へしとて家来を召集め汝等もおもひをも尤に親子に随ひ忠儀を尽へしとて、てんてに名を書付る

家来共皆引離安房守に随ひ出るも有伊豆守に付て在所を立
出るもあり、伊豆守在所を立と安房守鉄砲をうたせ伊豆守か
領地を焼はらひ伊豆守八伊勢山の父か取手を押破て御味
方の印と諸人感するなり

一 慶長五^庚子年七月十九日、勢州へ働西軍八

安芸宰相秀元

完戸備前守
是ニシタカフ

長束大蔵正盛

中江式部少輔直隆

長曾我部宮内少輔盛親

山崎右京進定勝

蒔田権之介

松浦安太夫

一 勢州安濃津城八富田信濃守か城也、同国上野城八分部左京亮か城也
同国松坂の城八古田兵部少輔か城なり、就夫家康公御意に東軍西
兵の戦の場八美濃国成へし、然八勢州の通路後八不自由成へけれ

は急馳上るへしと被仰付候、故三人共諸勢に先立面々の城へ入、分部か上野の城八要害悪敷かゝへかたき故、富田か津の城行程一里半へ籠て東口をかたむ、古田も松坂の城へ入たりけれ共敵寄さりけるゆへ人数をわけて津の城へ遣し南口を固めさする

一 八月二十三日、大坂勢津の城へ押寄東南をかこみ廿四日に毛利勢完戸備前守城の西を廻りて南口を攻破り二三の丸迄乱入、分部よく防といえとも完戸きひしく責破りし故、不叶して引入処に毛利か先手付入に乗込、其時上田吉允防戦ひ城門をたつる、毛利秀元か先手中河清右衛門紫のホ口うち死仕る、井上清右衛門八紛て城中へ入廿五日に首を取て出て帰、廿五日寄手竹千把を以て責よる廿六日に八責口より矢文を射るに付富田も城をかゝへかたく思ひけるゆへ、和睦を調へ城を渡し髪を剃て高山の城へ入、津の城へ八

蒔田権之介・中江式部少輔・山崎右近入替也、太平の後富田信濃守
信高を被召出伊予の宇和嶋を被下

一 勢州上野の城八羽柴伊賀守か城也、伊賀守八東国へ趣たりけれ八
是も急馳上る処に留守居はや城を明渡し新庄越前守請取の
由、中途にて是を聞登る事不叶して関ヶ原の御人数に加る

一 岩手の城八稻葉蔵人通茂か城なり、九鬼大隅守嘉隆か知行入交り
境の事に付兼て不和なるゆへ、稻葉東国より上りて城へ入と
九鬼人数を催し責来る、稻葉足輕を出して攻合をかけ
けれ八九鬼一円不取合人数を引てかへる

一 石田治部少輔八東国より大勢責上る由を聞方々の城へ人数を籠る

水口城へ 長束伊賀守 大蔵少輔弟

龜山城へ 岡本下野守

神戸城へ 羽柴下総守

桑名城へ 氏家内膳正

海手八 九鬼大隅守 兵船ヲ揃へ是ヲ守ル

来嶋八 菅平右衛門

舟手トシテ伊勢尾張ノ津々浦々工寄テ爰カシコ放火ス

一 八月朔日、関東よりの先手大手八福嶋左衛門大夫正則からめて八池田

三左衛門輝政に被仰付、井伊兵部大輔直政・本多中務大輔忠勝を為御名

代御上せ被成候処に

前二モ七月廿八日小山ヨリ直ニ上方へ登トアレ八石田ニ一味ノ面々ナルヘシ
又以味方衆アリト云トモ其八前ニ書タル富田信濃分部左京

古田兵部等之伊勢国ノ
城主ノタクイナルヘシ

同十四日清洲に参着す、其外の大名小名八皆先

たち登りて在々所々に陣を取御下知を待、濃州内御味方の城々

松本城

徳永法印息左馬之介寿昌

左馬介寿昌八関東ヨリ直ニ松本へ来テコモル

今尾城 市橋下総守正総

西兵高木八郎兵衛今尾ノ押エトシテ高洲ニ罷有異本多芸トアリ

一 八月十六日、石田治部少輔三成己か城佐和山より大垣へ出る、相伴人々

備前中納言秀家 薩摩侍従義弘 嶋津中務大輔昌久

同又七郎忠恒 小西撰津守行長 福原右馬之介直高

熊谷内蔵介直陳 相良宮内少輔頼定 秋月三郎種宗

垣見和泉守家純 高橋主膳正長昌 木村宗右衛門

同伝蔵

都合二万三千六百余人、岐阜黄門秀信 織田信長嫡孫城の端龍寺にかま

之介信忠嫡子

(瑞力)

へたる三ヶ所の取手へ垣原彦右衛門・河瀬左馬之介に千余人を給て加勢に

籠る、又犬山の城へ石川備前守貞清を入、稲葉右京亮貞通子息彦五

郎一通 父子濃洲郡上ノ城主・関長門守一政 勢州関ノ城主 に大坂の弓鉄炮の頭を加へ

て二丸をかためさする

一 八月廿七日、遠藤但馬守常利・西尾豊後守正照犬山の城の加勢に入たるを聞さらは郡上の城を責取らんとす、金森法印・同出雲守重頼も東国より登て飛驒の居城にゐたりけるか我らも郡上の城を責申さんとて遠藤・西尾に加る稲葉父子犬山にて聞之後詰として来て一戦を取結ふ、然共内々稲葉も家康公へ心さしを存候故、私の遺恨を捨て和睦を調へたかひに陣を退く

一 松本に罷在徳永清洲へ来て福嶋左衛門大夫に申ける八今尾城の押として高木八郎兵衛高洲の城に罷在と申なから其身ふせうに候へ八なかく城を持忒候事ならず候へとも人の嘲を存候故、守居申候、敵を請候八、早速城を開へき覚悟にて候之間馬を出され追払せ給へと云、左衛門太夫聞いていまに大敵向候へきに左様なる小城に

とり懸り候事わろく候半とて承引せず、徳永たつてすゝめ
人数を出し城門に入むとするに思ひ外高木鉄炮を放かけ
させきひ敷城を守故、徳永・福嶋か人数少々損す、市橋下総守
今尾の城に有けるか是を見て早々出向、福嶋を今尾の城へ
伴ひ入る、其内に高木八舟に乗て西美濃へ退く、福嶋・徳永か楚
忽をいかりて清洲へ帰る

一 江戸より村越茂介を御使として清洲へ被遣候是八諸大名への御見廻
の御使也、井伊・本多に村越申候八家康公被仰候八是に居被申か
たゞ御出馬之時分を尋被申候八、御出馬の事八諸大名衆働次
第敵のもよふ、其注進を御聞被成御出馬有へきと申候へと被
仰候と云、井伊・本多聞て諸大将二心なく何も忠心を存候事疑ひ
なく見へ候に御疑心有やう哉仰八如何なるへけれ八申なをされ候

へとのことなり、其翌日諸大将を清洲へまねき何も骨折に思召御見舞の御使として罷登之由にて公命之趣茂介申渡す其時諸大将衆御出馬八いつ比にて候半と申時、茂介思案に井伊・本多か遠慮尤なれとも被仰付たる事を私として申たかへん事いかゝと思ひ江戸にて被仰付候通に申、左衛門太夫正則聞て其趣御尤に存候、今迄敵方へ取懸不申候事誠に延引にて候、明日正則先陳^(陣力)仕北方の歩行渡り候半と申候へは井伊・本多申八正則の先陳^(陣力)八かねてより被仰付候儀に候へ八誰かは望候へき但、搦手の池田三左衛門八他国勢にて候へ八船自由に無之候、正則八自国の事にて候得は舟も筏も自由に候半俣 涛を被越歩行渡りを三左衛門へ被讓候八、家康公も御大悦たるへき由申に付正則も合点也、乍去北方の渡り八岐阜の城

へ近く候得は敵出て防ぎ候へし、我等八舟筏にて手間を取のみならず敵方へ遠く候へ八池田からめてにて軍を初候八、大手へ向たる我等の面目なく候といへ八兩人申ける八左候八、池田に軍法をかたく守せ貴方の備を先立させ申へしとの事に付評定極る

一 大手福嶋左衛門太夫正則に相従ふ人々、田中兵部大輔長政・同民部少輔長頭・加藤左馬之介嘉明・京極修理亮高政・藤堂佐渡守高虎・生駒讃岐守正俊・寺沢志摩守広高・蜂須賀長門守至鎮・黒田甲斐守長正・井伊兵部大輔直政・本多中務大輔忠勝・同美濃守忠政なり

一 搦手池田三左衛門輝政に相伴人々、浅野左京大夫幸長・堀尾信濃守忠氏・山内対馬守一豊・有馬玄番頭豊氏・一柳監物直末・松下右衛門吉綱なり

一 八月廿二日、池田三左衛門輝政搦手の大将として河岸に押寄ける

木曾川
河田渡

案のことく岐阜より勢を出して川をわたさせしと防
く、池田・浅野・堀尾、木曾川を早瀬を轡をならへて乗入渡せ八
岐阜中納言秀信の家来に木造左衛門佐・百々越前守三千式百
にて防戦、秀信も閻魔堂迄馬を出し使番をはたらか
して下知し給へ八終に味方新加納を破て押入故、岐阜の兵津
田藤右衛門・同藤三郎百々越前不叶して河手筋へ引入池田家
来飯沼勘兵・藤田権右衛門打死する

一 大手の人々八筏を集て惣軍を渡し其辺の在家を焼払て陣
を取たるに搦手の池田今日敵と打合たるよしを聞、大手の大
将衆腹をたつて福嶋か陳(ママ)に集りて評議様々なりけれ共一途
に落つかす、其時加藤左馬之介嘉明申八皆々の御相談岐阜の城を
攻とらんとの事故に評議落着不申候我等存候八明日未明より

皆々人数を被出岐阜の城をうかゝひ御覽せよ、若搦手の衆岐
阜へさきによせ候八、岐阜を捨て石田三成か籠り居たる大垣の
城へ取懸責落し候半八いかゝ御座候半哉と申せ八皆々尤と此儀
に同じ、明れ八廿三日未明より人数を押し出す道に竹鼻と云所有
爰に杉浦五右衛門三千石ノ主ナリ石田に組してたて籠る福嶋正則か息刑
部大輔正之押破て通る、さて岐阜へ八寅卯の刻に着たるに
搦手の衆八一人も見へすさらは押寄攻よとて鉄炮を打かけ
乗込程に其俣岐阜の町口を破る韃屋口ト云、瑞龍寺山の手の南をは
柏原彦右衛門かたむ浅野・細川・加藤に福嶋か先手福嶋伯耆守正
信正則カ甥ナリ着添て密敷責入故に柏原彦右衛門討死す、首を八浅野
か手へとる、佐藤主馬介も討死す、河瀬左馬之介八秀信と本丸に
籠る秀信ノ旗八白地ノフタノニ瓜ノ紋也馬印八ノウレンニ瓜ノ紋ナリ、大手七曲に八木造左衛門佐・津田藤右衛門・同息

藤三郎・百々越前守、城戸を閉て防坂口より武藤か取手の間にて寄
手押入押出され敵味方互に強働有中にも津田藤三郎赤纒を
さして度々ふみ留て戦、細川か郎等幸田次郎介と云者名乗かけ
て津田と戦、終に首をうつ、又細川か郎等に榊田半介城兵生駒
平三郎と組て二人なから谷へ落る、半介下に成なから生駒をつゐて
首を取、沢村才八郎 後号 大学 八城兵中村伝右衛門を討、秀信の兵にて八
梶川才三郎 弥三郎 力事也・武藤助十郎・入江左近・安達中務・山内右衛門・瀧川
治兵衛・和田孫太夫・斎藤齋宮・津田藤右衛門・十野左兵衛・織田兵部・織
田左衛門 信長 弟 すくれたる働有かくて武藤取手を捨て本丸の
七間屋くらをかゝへて防戦、福嶋か郎等吉村又右衛門其外四五人
破つたひ門櫓に入、京極修理亮高次 号若狭守 宰相二任ス 八荒神洞を責破る
折節搦手の輝政攻来る、福嶋是を見て惣かまへの土居へ上りて

輝政か押来るさきの家々へ火をかけさす、輝政か人数煙に
へたてられ桑原を廻り長柄川へ出て大手と一同に攻上る故
すてに本丸も乗とらんとするに付て秀信も自害致さ
るへき覚悟の処に深井左衛門尉・木村勘解由八木造か旧友なり
けれ八出合降を乞、城を渡し秀信の命をたすけ尾州へ
つか八さる

後高野工趣
山ニテ病死

岐阜の城へ八福嶋左衛門太夫か人数を入守らする也

伝曰秀信ノ御息女ヲ和田孫大夫預リ岐阜ノ城ノカル、
養育シテ佐々木義郷ノ北方トスルナリ

一 石田治部少輔三成、嶋津兵庫守義弘岐阜後詰として昌久河戸
辺迄人数を出す、先手八杉江勘兵衛・森九兵衛にて河戸の堤迄来
る、黒田甲斐守・藤堂佐渡守・田中兵部大輔八岐阜の城責の後陳
なりけれ八手に合さりける故、此後詰の来を聞て幸成とて河戸
へ向ふ生駒讚岐守正俊・寺沢志摩守広高・中川肥前守正則・幸山相模守

一貞・村越兵庫頭も河戸へ向、然とも水深くして殊みなきり落
て渡す事難成いかゝせんとする処に長政か手前の川つら
広くさゝ波たつゆへ、黒田・藤堂方より田中か所へ使を立て
申八其方の手前の瀬浅く見へ候間それより渡可申との
事也、田中心得申候、乍去瀬ふみをさせ見可申候半とて
家来に云付たけのたゝさる所ふかみへ入て見する是故
先手少おこたる所を見すまし、田中一番に乗込是を
見て出し抜れたるとて惣勢一度に横合に乗入て向の
岸にあかる、田中一番なりけれ八敵に逢て進む、敵人数
を引て逃る大将杉江勘兵衛殿を仕処を田中か兵辻
勘兵衛鑑を以突、松原善右衛門つゝき来て杉江か首を取、猶
敵を追かけて渡部進之介を討、田中か手にて家康公

より御感状を被下八宮部対馬守・同庄右衛門・垣見駿河守・赤尾某など也、森九兵衛八堤つたひに大垣へ退く、此時石田・嶋津、横合にかけあひたら八上方勢勝利を可得候を僉儀区々にして終に皆大垣へ引入

一 犬山の城に八石河備前守貞清に加勢をして関長門守籠、此押には中村式部大輔か人数を向らるゝ、一氏八病死、息一覚八幼少成故、一氏か弟彦右衛門一栄人数を引ま八す羽黒犬山へ行
程二里より城近く押寄、陣を取といへとも城より出て不防、関長門守一政内通仕処に岐阜落城を聞て石河も降参仕、城を明わたす

一 八月廿九日、江戸へ御注進到来去ル廿三日岐阜の城を攻落并河戸の敵を追払候由聞召、九月朔日、家康公江城を御出

馬あそはし、十一日に清洲に着御、十二日八一日御逗留被成、十四日に赤坂勝山に後陳をすへられ諸大将御迎として池尻呂久迄出向申、然処に石田三成か郎等嶋左近と云者三成と相計て株^(ママ)瀬川に人数出し遠江・駿河の今のほりの陳屋へ鉄炮を打かけさする勝山に居申候、中村か郎等とも内若者共乗出してかけちらさんとするを敵兼ての謀なればよわくと引退を十町計追かくる、敵手立にて味方を思ふ図にさそひ出し伏兵よきすに起り立て中村か勢をうつ、味方の老たる者とも掛付て制すれとも最早先にてとり結ひたれ八力なく制せし者共も進み戦、此野にて能宮頼母・升田五兵衛・原田甘利を始中村郎等多く討死す、有馬玄番横合にかけて敵を追くつす、敵又

取て返し戦、株^(マ)瀬川の岸にて有馬か郎等稻治半兵衛と三成か郎等花本外記と鑓合す、家康公、本多中務を被遣て御下知を以味方を引入る、稻治八始堤の下にて鑓を以て突殺したる者の首を持って御前へ罷出る、御覽被成御褒美被遊候

一 秀忠公は江戸より山陽道を御登り被成関ヶ原へ御出合被成候、御軍法定て御出馬也、去ル年浅野弾正少弼長政其身の誤なくしてかすか成体にて甲州に罷在を被召出御供に御つれ被成る、御供の人々先陳は榊原式部少輔康政也

大久保相模守忠隣 本多佐渡守正俊 酒井右京大夫忠重

真田伊豆守信之 仙石越前守忠俊 石川玄番頭康長

日根筑後守吉重 森右近大夫忠政 牧野右馬允貞氏

都合三万八千余騎にて御出陣なり、信州上田の城には真田安房守昌之次男左衛門佐幸村罷在故、近辺に火を放ちて攻させられんと被成処真田刈田を仕、放火の者共を追払むとて城より人数を出すを牧野右馬允か勢出向ひて戦ひ城中へ追入る、城より又突て出追入追出されせ八敷せり合あり、此時秀忠公御近習

中山助六

太田善大夫

朝倉藤十郎

後号
筑後守

辻忠兵衛

戸田半平

斎藤久右衛門

鑓を合、鎮目市左衛門も是につゝきて鑓を合する也

今、江戸ニテ真田七人衆ト申八中山勘解由・小野次郎右衛門・蜂屋七兵衛・太田善大夫・辻太郎助・鎮目市左衛門・斎藤久右衛門

大久保相模守・牧野右馬允か者とも強く戦多く討るゝ是により兩人下知を加へて人数を導入たやすく攻落かたき

に付て其後八遠巻にて日数を送らるゝ故に関ヶ原の御陣に秀忠公あ八せられす候、是大久保相模守か誤成へし、九月十五日に関ヶ原の御合戦に御勝利を得させ給ふよし聞召て後夜を日について御上洛被成候時、真田か上田の城の押へには森右近太夫忠政を指おかれ、秀忠公八木曾路を御登被成、家康公へ八大坂にて御対面なり、天下平均の後真田安房守・同左衛門佐八伊豆守か御忠功に付罪を御免し被成死罪をなためられ候故、高野山の麓に居在して安房守八大坂陣よりまへに久古山にて病死仕歳六十七也、左衛門佐八大坂陣に籠城するなり

一 九月十日、石田治部少輔三成大垣を出て関ヶ原に陣せんと大垣本丸に八福原右馬介直高、二の丸に高橋右近長行・秋月三郎

種宗・相良宮内少輔頼貞、三の丸に垣見和泉守家純・熊谷内蔵允直陣・木村宗右衛門息伝蔵かれ是七千人を残置、其日八夥敷大雨降けれとも浮田中納言備前の秀家・嶋津兵庫頭義弘・小西撰津守行長を伴ひ大垣を出て牧田の脇道を通りて関ヶ原に陣を取、本より相国の事なれは安芸宰相中納言毛利輝元・吉川駿河守元春・安芸守は勢州より関ヶ原へ出合て陣を張、長曾我部宮内少輔盛親・長束大蔵少輔正盛、三万余騎にて南宮山に備たり

一 前田肥前守利長・同孫四郎利政八加賀越前の境細呂木に人数を出すとき利長の縁者中河宗伴大谷刑部少輔

吉隆

大谷刑部八家康公御目ヲ被下候ニ付辱存罷有ニ付慶長四年大坂ニテ石田増田等家康公ヲ打奉シト談合イタシタル時モ人数ヲ集メテ御味

方仕ントイタシ候サテ御陣ニ御下ノ節モ御供仕候半トテ御跡ヨリ美濃国マテ出シ時石田三成ヒタスラ二頼一命ヲ給候工ト申故石田二組スル運ノ極也

はかり

事にてかゝせ出したる謀状に驚、金沢へ勢を引かへす時、丹羽宰相五郎左衛門長重か小松の城の押へに山崎長門守・高山南坊・太田但馬長九郎左衛門合て四手を御幸塚の上に上ケて備させ惣人数を引取時八九月八日の事なり、九月九日に四手的人数を引取時長九郎左衛門殿也、其時松平久兵衛申候八利長の本陣へ道二筋あり、一筋は浅井縄手なれとも小松の城へ近く候へ八敵出て応候へし、其上四方深田にて自由わろく候半俣遠く候とも今一筋の道を御まはり御引取候へといへは諸人結句久兵衛比興なる申事と思ふ体にて浅井縄手を引取也、案のことく敵くいつきしとそ松村孫三郎引返し敵に向ふに則馬より突落されて首をとらるゝ松村に続たる小松勢二十四人手もなく討とらるゝ

浅井繩手の小橋にて金沢勢踏留は水越縫殿介一番に踏留りたる故、松平久兵衛八水越か脇より進出て水越をこして鎧を合る、太田但馬か郎等岩田伝左衛門・井上勘左衛門大野甚六返合る、小松方に八拝郷治太夫・不破空兵衛橋の上にて鎧を合る兩人なから討死す、安孫子作太夫・宮田小兵衛・成田助九郎先をあらそい進来る、味方には太田か小性上坂主馬相加る故、終に八小松方引退時に小松の使番桜木源太夫赤（幌方）纒を指来て鎧をひらめかす故小松勢又ふミ留り暫有て相引也、後丹羽か臣江口三郎右衛門繩手道をつたいて山の上に備をたて、しはらく陣をかたむる也、其後金沢中納言利長上洛せんとせられるに弟能登侍従孫四郎利政、利長の下知に随八すして

能州に引籠、利長、土方勘兵衛雅朝を遣して異見を被
申候へ共合点なし、九月中旬、利長、土方をつれて是非なく
人数を出さんとせらるゝ其時西尾藤兵衛小松へ来て丹羽五郎
左衛門長重に異見を加へ、九月廿六日、利長と長重と和儀調
小松口かけ橋河寺井海道の橋の上にて互に人質を取か
はし、利長八是より北の庄へ趣く、青木紀伊守一矩も籠城
の支度致候を土方城中へ入て異見を加し也、其頃紀伊守
八病氣故、子息右衛門肥前守に付て上洛致す、紀伊守相果て
後一跡を被召上候、其時利長様々御訴訟被申候へ共不叶
右衛門佐八流浪仕る也
松平久兵衛ヲ後伯耆守ト異本ニアリ
又小松ニテ鑓合タル八坂田團成田トアリ

一 九月十三日、細川兵部大輔と寄手の和儀調る八勅使として
三條大納言下向の故なり、兵部大輔藤孝城を明渡して出さて

相伝の源氏物語 并二十一代集を御門へ指上奉るとて

いにしへも今もか八らぬ世の中に

心のたねを残すことの葉

一 豊後国杵築城を長岡越中守忠興に前かた下され候

故、家臣松井佐渡守・有吉四郎左衛門を杵築へ遺す、此城八大友

宰相義統

太閤朝鮮陳ノ時彼国へ向其働ヨカラサルニ付秀吉イカリテ本領ヲ
トリ上父子ヲ輝元ト加藤肥後守ニ預扶持方ヲ被下候

本の主

なりつる故、国人一揆を起して石垣原に要害をかまへて籠
る、又大友か臣柴田小市郎を大将として杵築にも一揆を
起す、松平佐渡守・有吉四郎左衛門此企を聞て柴田打殺堅固に
城を守る、黒田如水八同國中津にありけるか大友か計略を聞
退治せんため人数を集、垣見和泉守家純か領分富来八近
辺なれとも辺土なれ八とて熊谷内蔵允直陳か領分安喜

城の辺を通るに内蔵允八石田に同意して上方に有故に
郎等とも城より出て如水か者を十余人討取、如水か先手
母里太兵衛安喜の城の兵を追すて、石垣原によせたる
に松井有吉八如水よりさきに立石へ働いて勝利を得て一揆
を多く討取たるに大友か臣吉弘加兵衛と云者二手に備て
懸りけれ八長岡か両臣廿町退、一揆のものつかれけれ八互
にひき退く所へ如水か先陳友野四兵衛かけつけて吉弘か
備へかゝり討死す、又如水か郎等井上九郎右衛門かけ来て敵を
突崩し吉弘宗義掃部之介を討取、一揆共石垣原にひき
籠りけるを如水計謀を以和を調て九月十三日に義統を
とりこにして返るなり

一 奥にて八最上山形の城主最上侍従出羽守義光

号斯波呼
称山形

家康公の御味方成けれ八上杉景勝より一の家老直江山城

守

米沢ノ城主
三十万石領

を大将として春日右衛門

五百騎

・大関弥七郎

後号水原
常陸ト

上泉主水を山形へつかハす、江口五兵衛自害す、是を初として山形領分の城一日の内二十一ヶ所責落す、山形勢利を失ひ本城に引籠直江進て山形の城を責んとする時、上泉主水か云山形の城八西南沼深くしてかけ引自由ならねは先引入て可然といへは直江をはしめ皆々同意せずして長谷堂を

山形ヨリ
二里

責崩すへしといへり

一 金吾中納言秀秋八去ル八月朔日伏見の城を攻落し大坂へ下り、秀頼にまみへられ損たる兵具を調へ江州石部へ出それよりも勢州の関にて日数を送られ日野より垣原へ出らるゝ其内黒田を以内々家康公へ被申入候八某事

御恩蒙り候段忘申事にて無御座候、今度大坂の催促のかれかたく候故、伏見の攻手に当り無是非責落申候自今以後可抽忠勤候と申上られ、九月十四日松尾上に押のほりて陳を取、戸田武蔵守、石田治部少に云ける八金吾秀秋かふりを見候に明日の合戦必すうら切可致様子にて候、此者に裏切せられて八打負、首をさらされん事必定にて候とても其方に命をまいらする八何国にて死するも同事にて候間、金吾と指違死て明日の合戦味方勝利を得候様にて仕とて石田に末期のいとまを乞、秀秋の陳へ行て対面せんと望む、金吾早々悟て返事に云出しける八御出悦入候、然共先刻より心地悪敷候、明日の合戦大事に存候間、養生のため臥ん、乍慮外御目にかゝるましく候と云武蔵守又云入けるは

御申の通明日の合戦に付申合度事御座候故、罷越候気色悪敷御臥候八、不苦候間御寝間迄参候半と云入ける金吾家老を出して此者八我等の胸中も同事の者にて候間御談合の趣を被申聞候へとて金吾は出合被申ぬ故、力なく武蔵守八本陳に歸、石田に向秀秋の様子をかたりもはや明日の合戦疑ひなく候とて其夜武蔵守八陳を去ると云、因茲治部少大谷刑部少輔を以関の藤河に備させて金吾か裏切を遂さへん事をはかる

一 吉川駿河守元春八御内通申といへとも山上にかたく備て敵味方のしるし慥に見へさりけれ八池田・浅野を吉川か陳に對して備させられ、また大垣の押へ堀尾・山内・中村・有馬を被仰付

一 九月十五日の早旦、関東の御人数井南岡はなに出させられ

家康公八未明より赤坂を御出馬被成、野上と関ヶ原の中途に御旗を立らるゝ、其朝八霧深くして敵味方の指引見わけかたし、福嶋左衛門太夫正則か手より森勘解由・沢村左衛門祖父江法斎を物見に出し、則敵の様子を法斎を以申上る三成を初一味の西国勢悉関ヶ原に出て備申候間、早々御一戦を被懸候へとの言上なり、家康公法斎を御前へ召直に敵のもやうを御尋被成御馬を出さる

一 西国勢は十七段に備

石田治部少輔三成

嶋津兵庫頭義弘

宇喜多中納言秀家

小西撰津守行長

は石原峠を引おろし谷川を渡て関ヶ原の北野に出る西北の山を後にあて首たつみに向備たり

大谷刑部少輔吉隆

平塚因幡守為広

は関の藤川を前にあて岸影に軍を備へ松尾山の秀
秋討てかゝるならば爰にてさゝへんと人数をたつる

脇坂淡路

小川左馬

長束大蔵

増田右衛門

前田徳善院

安国寺

龍造寺

小野木縫殿

小河土佐

石原老岐

沢田伊賀

安芸秀元

吉川駿河

長曾我部

乾豊後

五嶋淡路

平戸法印

布施屋飛弾(驍力)

玉置小平太

高橋九郎

有馬修理

青木紀伊

太田飛弾(驍力)

高橋主膳

堅田兵部

成田中務

岡部又十郎

対馬侍従

朽木信濃

毛利長門

赤座九兵衛

熊野新宮の者共も是皆石田に組して関ヶ原に陣とる

一 関東の御先は福嶋左衛門太夫正則相続く長岡越中守忠興・加藤左馬介嘉明・黒田甲斐守長政・小関に備たる石田・嶋津か陣へ切懸たり、井伊兵部大輔直政八薩摩守忠吉井伊兵部力を伴ひ福嶋か脇備より出んとするを福嶋先陣八かねてより我等に被仰付候に先立んと八御軍法を被成候哉と尋けれ八全く抜かけに八あらず物見のためにて候とて人数を八跡に残し忠吉と進み出る、さて福嶋刑部正之・同伯耆守正信・大野修理治長・古田織部重勝・猪子内匠・舟越五郎右衛門・佐久間久右衛門・同弟源六敵陣に乗入、敵古河伊豆・案孫子善十郎・小坂助六・兼松又四郎・福熊市左衛門・坪内喜太夫父子・生駒因幡守すくれたる働あり、味方伊丹兵庫・河村助左衛門・村越兵庫爰にて討死也、本多中務大輔入替て戦、息本多内記忠朝後出雲まつ先に守ト号ス

進む殊に敵の首を取て御目にかくる敵戸田武蔵守重政
備を乱し懸来て味方津田長門守信成と戦、織田河内守
長孝横鎧を入れて戸田武蔵守を突て首を取、戸田か郎等鶴
見金左衛門主の討死を見て其場にて討死す、織田有楽
長益八石田家臣横山喜内を討、西兵終戦まけて崩にくる

一金吾中納言秀秋八松尾山より家臣平岡平右衛門・因幡内匠・
松野主馬を先として六千七百を引おろし大谷刑部吉隆に
切かゝる、大谷申ける八我日比家康公の御芳志を請候故
關東へ下らんと思ひつれとも石田に被頼かくのとし、しかれ八
家康公へ御恨八なし金吾の若者にたしぬかれ今度の
軍に負と思へ八恨無念は金吾にあり、いさあいかゝりに懸
りて金吾か首を取て思ひてにせんと平塚因幡守と相友に

懸りて金吾か備をかけちらす、秀秋の郎等田中勘左衛門・布目新平討れて阮(マ)敗軍せんとする処に石田に組したる脇坂中務・小河土佐守祐忠・朽木河内守利綱かねてうら切の約束有けれ八藤堂佐渡守高虎、脇坂か備へ向て相図の旗をふりけれ八三人の侍大將是を見て大谷か陣へ突てかゝれ八藤堂・京極か横鎧にかゝる勝ほこりたる大谷も裏切と横鎧とにもみ立られ敗軍す、平塚因幡守為広八敵二人を鎧付其首を取て郎等を近付、汝八此首を以て大谷か方へ行我等事日比の約束をたかへすかくのことくに候、急き自害を被成候へ我等を今討死候半と云付る所を小河土佐守か郎等榎田太兵衛今迄一手に備てよく知たる事なれ八飛かゝつて平塚を討取大谷は平塚か使に向て因幡守か武勇を感じて馬上に

て自害す

大谷刑部近年三病氣ニテ頃日八目ミヘス候ユヘ
敵ノ旗色軍立分明不正故下知思様ニ不有也

石田・嶋津か手

最前に破軍せしか八小西撰津守を始而西方の諸將悉討まけて藤河をこへはしり伊吹山草の谷へ逃行、関東の諸將備を乱し追て首を取事数を不知、九月十五日の事なり

一 同日、最上にて八景勝の兵共長谷堂を責とらんとて直江山

城守八管沢山に陣を

取長谷堂
ヨリ十九町

上泉主水八鬼越山

八七堂ヨリ、
十町

春日右衛

門八山崎に陣取る、最上出羽守義光是を聞稻葉山に

郭ヨリ
二町外

備を

立る、由利庄内八もと景勝味方成しか義光に属し下治右衛門
五百余騎にて山形より四里西に勢を出す、長谷堂に八城主志
村伊豆守加勢として酒延越前・氏江九兵衛・富南相模守・東根常陸
立籠る 山形ノ未申ノ方、
米沢ニ向 志村か郎等に大風右衛門・横尾勘解由、景勝方
上泉か備へ切かゝり騎馬十四人足輕少々討取、伊達政宗八義光か

甥なりけれ八伊達上野介・石河弥兵衛に三百余騎指添て長谷堂へ加勢す、春日か勢五百余騎城門へ責入志村・酒延三百余騎にてかけ散す、爰にて景勝方松平空之助討死、同十六日迄直江山城守・上泉主水と戦、同十七日景勝方穂村造酒之介・篠弥七郎三百余騎にて里見民部か籠たる上之山山形ヨリの城を責むとて中山と上ノ山との間に出る城より河口と云所の深谷に伏兵七百人を置いて米沢勢のきほひ来るを不意にほこつて米沢勢を討米沢勢崩にくる、山形勢追討に打日阮に暮る直江蹈留て備を立る、山形勢も爰迄討陣す上ノ山より使を立引取へしと下知ある故、引取らんとする時、直江か勢したつて打むとす、山形の平坂弥兵衛敵味方の間に馬を乗入殿りして引取処を景勝方穂村造酒之介乗出し吾に繼て討死と下知して唯一騎追かく

る弥兵衛引返し穂村と組て首を取、是を見て篠弥七郎
かけ来るを荻田主馬之介又弥七郎を討取、惣して今日の合戦に
景勝勢二百三十騎討死す、廿四日には上泉主水先手とし
て合戦を始る山形勢又うち勝て景勝方多くうたる、松平
陸奥守正宗か加勢の伊達上野・石河弥兵衛能戦手前の兵
も三十余騎討死す、直江大関弥七を以上泉に申ける八今日は
日暮戦下罷成候間軍を引可然と云遣ける故、上泉も軍
を引山形衆した八んとする所を大関只一騎かけ入て猛威
を振戦死す 二十四歳、
上泉城主 金原加兵衛 十八
歳 大関か首を取、廿九日に直江
軍を引退所へ城よりくいつき出て討留んとす、直江か後備
大関弥五郎・溝口左馬之助ふみ留て防き戦、直江も取て返し敵
を追払ふ、山形衆百余人うたる、時に二本松右京手勢百余に

て横合にかけたて景勝の将天堂弥七

天堂ノ城主
山形ヨリ三里北

を討取、溝

口鑓を合小橋の詰めより殿をして引取漸日暮・溝口、直江に申けるは夜に入引退八味方破軍すへし、明朝退給へと云直江尤也とて夜明て勢をすゝむいきおひを見せて引取

中途に至処に十月朔日

十月朔日
ノ事ナリ

濃州青野原にて石田敗軍を聞弥

兵を引米沢に返る、山形よりも又した八す此戦に景勝人数

二千余被討なり

今下野国那須衆ノ内二大関アリ此人二問タレ八大関弥五郎力子孫二八非ス弥五郎力名字ヲ続テ名乗ト云其云伝ト此書ヲ以カ

カヘミレ八大二相違アリ後日可改云伝ノ趣大関弥五郎ト云八下野国那須ノ内黒羽ト云城ニ住ス然所太田原備前守黒羽へ押寄せ討ントスル弥五郎城ヲノカレ出テ城ノ西石井沢ト云所ニテ自害ス今二弥五郎塚ト云アルヘシト云然所弥五郎猛武士ヲタハカリテ討タル故死実太田原ニタ、リヲナス依之弥五郎ヲ丹生明神トイハヒ太田原力嫡子二大関ヲ名乗セテ大関右衛門ト号ス其流ナリト云々景勝御陳ノ時分八黒羽八右ノ大関右衛門佐力子大関土佐守ト云者在城ス不審ナリ又曰大関弥七力討死後日二可改大坂陳ニ水原七十歳景勝力陳ヨリ乗出トアリ水原八大関力事ナリ

一 嶋津兵庫頭義弘八味方の破軍をはなれ手勢五百騎計を真丸

にかため軍場を筋違に土破たらへ退んとす、井伊兵部直政八始より薩摩守忠吉と一所に備たるか嶋津か退くを見て追かくる嶋津引返して戦、嶋津か家人松浦三郎兵衛と名乗て薩摩守に打てかゝる忠吉一太刀切給へ八松浦うけなかし忠吉の弓手のかいなを切、然とも小疵也、忠吉二の太刀にて松浦かわたかみ付よりけさかけに切給へ八

此太刀
大左文字

忠吉の郎

等嶋津九兵衛かけ付て首を取、忠吉手をおろして戦ほと
の事なれ八馬をも乗はなしかち立なりけれ八井伊か郎
等江坂と云者我馬をまいらせ口を取て伊吹に歸る、直政も
めてのかいなに深手を負也、爰にて嶋津か家人十二人討死
して義弘を落す

一 かくて敵悉破軍せしかは山岡道阿弥罷出御悦の勝関

御あけさせ可成かと申上げれ八家康公仰に八今日の合戦には兼て勝利得へしと思ひもうけたる事なれ八敵の敗軍不珍、然八味方の諸大将の内室皆敵軍にあり、三日の内は大坂の妻子を皆々に引渡し、其上にて勝鬨を揚へしと被仰に付、諸大将ことくく感し奉る

一金吾中納言大谷を討、則村越茂助を以て御礼申上る、佐和山石田三成城なりの先手を仕る可と預けれ八望相叶、朽木・小河・脇坂をも佐和山へ向らるへき由被仰付候

一 此年越後国城々には

端城 村上周防守義朝

柴田 溝口伯耆守宣勝

蔵王山 堀美作守親直

椽尾

神子田八右衛門友政

三條

堀雅楽頭直清

堀丹後守
直寄兄

溝口伯耆守方より村上周防守寄所へ使を以申ける八一揆此表にを
こり国中の田畑をあらし申候間人数を御出候様にとの事
なり、周防守心得申候由返事致すに付溝口伯耆守七百余騎
柴田へ出る 行程、三里、其間所々の郷人さまくるを或八追払又八討取
一揆また三条をかこむ大勢にて透間もなし、村上・溝口、三條山
の麓に陣し上の岸に大か、里をたてる三條の城の者とも
是に力を得て突て出る一揆を数百人討取 此一揆八景勝ヨリ計テ
小倉主膳ヲ後詰の功攻メシ同類ナリ
村上・溝口兩人なから三條に来る堀雅楽頭出向て後詰の功の
すみやか成事をのふる、雅楽頭か老父監物八春日山より柄
崎にて八里出る三條下倉の安否を聞繕所に濃州青野ヶ原

にて上方勢敗軍を聞、一揆共もことく逃失なり

一 九月十六日、昨日家康公関ヶ原の御合戦御勝利を得られ

山中より佐和山の南の並東山に御陣を被移、石田隠岐守

政成三成
カ父・同木工頭重成

三成
カ兄・宇多下野守頼忠

三成
カ甥か籠たり

ける佐和山の城を責させらるゝに越前中納言金吾、中納言
先手を請給のみならず伏見の城を責落したる不
忠を此度つくのはんため強く責懸る、城中にても命
をおします鉄炮をきひしくはなち矢を討出すゆへ
秀秋の人数多く討れ、或八疵をかうふりて屏下へ退く
然る所に長谷川左兵衛と云者返忠の心有て城中より矢
久を討出す、石田此返忠を聞て左兵衛を殺むとする故
長谷川城の水道よりのかれて秀秋の陣へ来る、明れの八

十七日、井伊兵部水の手より責入城中へ火をかけ関をあくる城の者とも防かねてみなく自害す

一 大垣のへ八水野六左衛門勝成

後号
日向守

・松平丹後守重正を去十

五日に被置候処に秋月三郎種宗・相良宮内小輔頼定・高橋右近長行、大垣の城の二ノ丸をかためたるに反逆を企さする十八日早旦、三ノ丸を堅たる熊谷内蔵充・垣見和泉守・木村宗右衛門を彼三人の相談にて二ノ丸へよひ出し手もなく殺し相凶の鉄炮をうたせけれ八六左衛門丹後守心得城中へ押入、堀尾・山内・一柳・有馬か軍勢一度に乱入、福原右馬助本丸をよくかため一日一夜持こらゆる、然処に十五日に関ヶ原にて西兵敗軍を聞力をうしなひて十九日に降を乞城を明渡し勢州へ退候とて朝熊にて自害す

一 京極宰相高次八去八月大津の城にたて籠一戦を
はけまれ候へ共其節運を開かれかたき故、和睦をいた
され候へけるか家康公江戸御出馬を聞より二度大津
にて旗を上る西兵

毛利七郎兵衛元安

輝元ノ叔父此人輝元ノ人数ヲ添ル

杉谷越中守

杉浦伊豫守

宮部兵部少輔

荒木兵太夫

増田右衛門尉

か軍勢九月七日より押よせて城を取巻、同十四日長等山
より大筒をはなし海陸より責寄出丸を破て大手の
門に入らんとす、此時由比介左衛門きひ敷鉄炮を放して防
此は多賀越中守・赤尾伊豆守城より外に出敵を防戦、松

浦伊豫守を始よせて数多々たるゝ、さて多賀赤尾城中へ引んとすれともよせて詰かけてなかく城へ入事かなハすして浜手をまはり漸城へ入よせ手多く討るゝといへとも死人をのりこへく押入て大手の門を破て責入故、高須八郎等共に防かせてひそかに城を遁、和州へ趣んとす道にて関ヶ原にて家康公御勝利を聞取て返し

家康公へ御目見被致大に御感被成本領被下

慶長十二年五月三日
卒 入行 年七十歳

京極長門守
高吉ノ嫡男也

浅見藤右衛門も浜手の門をふさかれ出道にまよふ

所へ増田長盛か郎等村金六見付て舅成けれハ我が陣へ伴ひ行

一 山岡道阿弥ハ始福嶋掃部か籠たる長嶋の加勢として籠たりけるか関ヶ原落去を聞て舟に乗て大鳥井に出る

長束大蔵小輔正盛関ヶ原の戦に打負退道にて行逢百余
人討取また桑名・神戸・龜山三ツの城を計謀を以請取
番兵を指置上聞に達す、家康公武功を御褒美被成候

関ヶ原落去ヲ聞テトアルニ前関ヶ原

御勝利ノ力チ関申上ル相違ナリ

一 長束大蔵少将八関ヶ原よりのかれて水口の城

大蔵弟伊賀守
コモルに

立籠る、池田輝政水口へ押よするに此城四方打ひらき外
より窺へき山なく城中に糧も水も自由なれ八速に落
すへき城ならねは輝政か弟備中守長吉を以て申けるは
関ヶ原一戦の後西国の大名小名共に家康公へ降参仕候処
貴方一人此城に籠らるゝ事縦何程の計を被成いか計
の武略をいたされ候ても運を開かるゝ事八成ましく候
輝政儀昔より馴染申候へ八少もおるかに思ひ不申候、敵

味方とわかち候へ八此如に候、此度家康公へ忠節申候へ八定て所領をも加増可有候、右申通の所存にて御座候へ八加増請候八ても大蔵の命を可申請候間相違なく城を明渡され候へと申入れ八大蔵計に乗て城を開渡したるを輝政たはかり済してうち取らんとす、大蔵はやく悟城にて討死すべき物を輝政にたはかられぬる口惜さよとて自害す

一 勢州鳥羽の城に八九鬼長門守・大隅守嘉隆たて籠る家康公より本多隼人佐を被遣て速に城を明渡し候へと御なため被成候処大隅守隼人を打殺し弥逆意に成申候依之子息長門守に被仰付鳥羽の城を責させらるゝ長門守父に向て弓引ん事本意不成けれとも君命なれは押よせ合戦仕候処大隈守関ヶ原の敗軍を聞て城を

忍ひ出て熊野へ越て自害す

一 筑紫にて八黒田如水九月十三日に大友を取こにして中津へ
帰るに安喜の辺を通るに城よりまた出てくいとめんと
するを伏兵を起て是を討、天より富来 垣見和泉
守城 を攻、城

兵きひしく防戦ゆえ人数を引て廿三日安喜へ帰り 熊谷内
蔵亮城

計策を仕、城内の木村孫左衛門弟右衛門に反逆をさせ城を
落し、同廿八日に又富来へ押よせて十四日の間取巻て責る、垣
見和泉守の兄助左衛門子九兵衛比類なき侍にてよく防、然所
に垣見か祐筆江良新左衛門と云ものをとらへ城中へ入、関ヶ
原にて西国勢破軍し垣見和泉守も大垣の城にて自
害のよししらす故、十月十六日に城をあけわたす

右ノ江良ヲ八黒田甲斐守カトラエテツクシヘ下スト見エタリ

一 嶋津兵庫頭義弘八関ヶ原より遁れて北伊勢へ出、大坂へ来て堺の商人田部屋作庵を頼、舟に乗て歸るに豊後の灘にて自害、これ八兵庫頭家人の舟に云付る八吾本船のかゝりを見当に乗へしとて沖をはしらするに其頃如水は安喜の城を賣時成けれ八城の後詰を氣遣、森江の湊に番船を置たるを嶋津か家人の乗たる舟本船のかゝりと思ひて番船のそはにいかりをおろしたるを番船よりとかめたるに驚にくるを番舟追かけすてに乗取むとする時、嶋津か舟よりほうろく火矢をなくるとてなけそこない我と船を焼なり

一 伊予国真崎の城は加藤左馬介喜明か城也、毛利輝元の家臣完戸善左衛門

備前カ・弟ナリ・曾根兵庫・村上掃部・野島等

人数を出し真崎へ使をたて、城を被渡候へと云、左馬介か弟内記家来細次郎兵衛・中嶋庄左衛門・安達半右衛門中々相渡すへからすとて一戦の支度成ければ輝元か兵とも三津浦に陣したるを九月十七日に細か武略を以三津の敵をせめ曾根村上野嶋を討取、関ヶ原にて石田敗軍九月十五日の事なれ八未勝負も不知時なり

一 九月十八日、家康公江州八幡山に被成御座候時、関ヶ原林蔵主小西撰津守行長を召連て来る、行長八耶蘇宗旨也

吉利支丹ノ事

此宗旨八吾と五体を損る事をいましむる宗門なる故、自害する事なく刀を捨て罪科にあはんため我と出る也

一 石田治部少輔三成八関ヶ原より逃のかれて後付随郎等もなく独身になり北近江の草能寺にかくれ居けるか腹痛を

やミて居たるを田中兵部聞付てとらへて家康公へ奉る、家康公、則鳥井久五郎成次を召連て石田八伏見にて汝か父彦右衛門元忠を攻殺たる者なれ八汝かためには父の敵也、心の俣に殺し候へとて成次に被下、久五郎難有奉存由申上その夜吾宿に石田を留て終夜結構に饗応、明る日家康公へ申上候八私の父彦右衛門伏見の御城にて命を捨申候八忠儀を奉存御恩を報せんためにて御座候へ八石田を父の敵ともさの三存不申候処御心を付させられ昨夜石田を被下候事有難仕合にて御座候、私宅に一夜とめ置申候へ八鬱憤も晴申候間私の手前にて誅し候事もいかゝにて御座候とて返し奉る、家康公聞召神妙のよし御感に預る

一 安国寺惠瓊八関ヶ原より落、それより大原・志津原・くらま寺・月照院などにけ隠居たるを寺僧共おい出す故、身の置所なき俛に洛中へしのひ出、商人の家へはいり込て居たるをとらへらるゝ

一 十月朔日今度逆徒の張本人

石田治部少輔三成 近江国佐和山ノ城主領十八万石行年三十三歳

小西撰津守行長 宇土ノ城主領二十五万石

安国寺和尚惠瓊 領九万石

右三人一ツ車に乗て洛中を引渡六条河原にて首を切也
一 日向国伊藤民部大輔裕隆八大坂に有といへとも家康公にしたかひ御忠節をはけまし度思ふといへとも重病故、働ならさる内に死去す、子息修理太夫裕広大歳日向国

飯肥の城に有、九月晦日軍勢を催して高橋右近長行か
同国宮崎の城を責、十月朔日城代近藤平左衛門父子三人
其外百余人を討取、夫より嶋津中務少輔昌久が城佐土原へ
押寄数百人を討取、筑瀬の渡にて又百余人を討取、扨高
橋右近八石田に一旦組いたし候へ共大垣の二の曲輪にて反忠
をいたしたる儀を以御赦免被遊、明年慶長六年に宮崎
四万石を被下也

一 豊後国臼杵の城八太田飛驒守政信か城也、同国岡の城主
中川修理太夫清秀八家康公の御味方として押寄けるに
家来中川平左衛門・吉田喜太郎・榎野五右衛門其外千余人大坂
より来る臼杵表を押し通り吉田か家来小垣源内・橋本伝
十郎相待戦故、中川勢利をうしなふ

一 筑後柳川城主立花左近將監宗茂八去ル八月京極高次
大津の城に初て楯籠し時、責手にて大津の城没落
致せし時より忍て下り柳川に罷有を鍋嶋信濃守勝
茂も一度石田か催促に随て家康公へ不忠仕候事を迷惑
に存其申分に仕らんと龍造寺より人数を出し柳川を
責んとす、柳川より小野和泉と云者榎原へ出て鍋嶋か
人数を追払んとすれとも究而軍を破たる所へ加藤主計・
黒田如水、家康公の御味方なれば鍋嶋に力を合んと懸
来るゆへ、立花左近降参申也

一 豊前国小倉へ黒田如水政成押寄けれ八毛利壱岐守勝信・同
豊前守勝永 後大坂二籠城ス 父子十月三日降を乞城を明渡す、扨
兩人ともに土佐の国へ流さるゝ

一 備前中納言秀家八関ヶ原より退く、江北の草の谷に忍
ひて其後舟に乗て大隅へ行連嶋津をたのまるゝ家康
公嶋津御退治として薩摩へ御勢を向らるへしと被成
処に福嶋左衛門正則達て御訴訟任言葉を尽して
御詫申に付嶋津を御ゆるし被下、嶋津又秀家の事を
様々なけき申により生害を御免なされ候て伊豆八
丈島へ秀家父子を流さるゝなり

一 長曾我部宮内少輔盛親

父八土佐守元親
去年病死ナリ

八関ヶ原一戦の時、勢州へ

働出るといへとも御さしたる事もなく濃洲南宮山へ出張
したりけれとも一戦を不取合、悉く軍兵散失ほうく
大坂へ出て土佐へ帰、一向御詫申上に付是も生害御ゆる
し本国八被召上なり

一 十月五日、毛利輝元を周防・長門両国計被下て余の国を

召上らるゝ

伝ニ云此時八輝元ニ非ス秀元ト云云石田謀反ニ付テ毛利甲斐守秀元ヲ呼

大坂へ秀元家臣ヲ集テ関東ニヤ随フ石田ニヤ組セント異見ヲ問フ家臣トモ大坂へ組シ給へ石田必勝利タルヘシト云時末座ヨリ一人出テ兵法ノ病等ヲ以関東ト大坂ノフヲ積大ニ関東勝利タルヘケレ八関東ニ組シ玉ヘト云時家臣トモ末座ノ異見推参也トテ取上サル故大坂ニ組シ此時秀元法体シテ罷出降申也

一 前田侍従利政

利長ノ弟能登ノ守護

八濃州御一戦の御催しに懈りふり

悪敷ゆへ能登国を被召上

丹羽五郎左衛門小松宰相長重モ御退治有ヘキヨシ然トモ秀忠公訴訟故ニ本国八召上ラレ奥州白河所代被仰付也

一 十一月八日、小西か宇土の城八加藤主計頭清正押寄て家来吉

村左近に向其身八搦手より攻る、飯田角兵衛・三宅喜蔵

宇土の侍と鑓を合す小西主殿

行長カ弟ナリ

南条を捨て防といへ

とも不叶して城中へ引取、其後城より杉本次郎助忍出

寄手の竹手把を焼清正の家臣逆川忠次郎、杉本と鑓

を合す、日下部与介・田中兵助・山田太郎右衛門・同伊右工門鑓を合

太刀打して敵を城中へ追入る者降参仕城を開き渡す
一家康公逆徒を悉御退治被遊御忠節仕候者ともに御
恩賞被下

慶長五年十月五日 毛利輝元減領国賜周防長門二ヶ国

安芸備後 福嶋左衛門太夫正則

播磨 池田三左衛門尉輝政

慶長八年備前被下同十八年正月廿五日二卒五十歳時参議従四位下也輝政跡
播磨国八嫡男武蔵守利隆備前国次男左衛門頭忠継淡路国八三男宮内少輔忠雄二被下

紀伊 浅野左京太夫幸長

慶長十八年八月廿五日卒又三十八歳御子無故
弟但馬守長盛一跡被下

筑前 黒田甲斐守長政

筑後 田中兵部大輔長政

備前美作 金吾中納言秀秋

出雲隱岐

堀尾帶刀吉晴

豊前并豊後杵筑

細川越中守忠興

土佐

山内対馬守一豊

伯耆

中村一学一氏伯耆守二成

勝山ノ城主中村式部一氏病死一学幼少成故伯父

彦右衛門一栄一学力人数ヲ師テ働アリ依之国ヲ給ル

若狭

京極宰相高次

丹後

京極修理亮高政

飛騨

金森法印

能登并加州大聖寺

前田備前守利長

始八利勝卜云慶長十九年五月廿日卒
五十三時從三位中納言

伊予松山

加藤左馬介喜明

同国今張

藤堂佐渡守高虎

因幡鳥取

池田備中守長吉

美濃高洲

徳永法印

丹波福知山

有馬玄蕃頭豊氏

伊勢神戸

一柳監物直末

越前并結城

三河守秀康卿

尾張

徳川薩摩守忠吉卿
号下野守

一 慶長六年二月御譜代の面々へ被下

江州佐和山

慶長七年二月
朔日卒四十二歳

井伊兵部大輔直政

勢州桑名

本多中務大輔忠勝

上総小多喜
後号出雲守

本多内記忠明

濃州加納

奥平美作守信昌

同大垣

石川長門守康道

三州岡崎

本多豊後守康重

同吉良

本多縫殿介康俊

同吉田

松平玄蕃頭家清

慶長十七年四月松平民部大輔忠清子ナキ故吉田ヲ松平主殿頭
忠利ニ被下主殿旧領ヲ忠清力弟清正ニ被下也

遠州浜松

松平内膳正家度

同懸川

松平隱岐守定勝

同横須賀
慶長十二年九月
十二日三十五歳

大須賀出羽守忠政

駿河田中

酒井備後守忠利

同府中

内藤三左衛門信成

同興国寺

天野三郎兵衛康景

同沼津 三枚橋卜毛

大久保治右衛門忠佐

後二諏訪ノ城ヲ被下慶長十八年九月廿七日死ス
子ナキ故一跡夕へ城地不富故御掃捨也

一 同年三月廿七日、秀頼公を権大納言になし申させ給、廿八日に秀忠公も権大納言に任し給ひ、六月膳所に城をつかせられ戸田左門一西にあつけらるゝ

一 同六月、上杉景勝先非を悔ひ秀忠公に便申降参仕、七月廿四日、京着仕八月廿四日に景勝か百万石を被召上直江山城守か領分米沢三拾万石を被下、景勝子を上杉弾正定勝と云、定勝の子を播磨守綱勝と云、綱勝早世にて継子なき故、上杉の名字絶申候に付吉良侍従上野介は綱勝か姉聳にて上野介か子八綱勝か甥なる故、上杉の跡を継せ被下、其時福島十五万石を被召上今八米沢にて十五万也

一 景勝百万石を被召上候内六十万石を蒲生藤三郎秀行に

被下、会津の城に罷在候飛弾守事也、是八蒲生氏卿の子息なり、慶長十七年五月十三日病死す、跡絶候故、会津を加藤左馬介喜明か子加藤式部に四十万石にて被下候処大猷院殿の御代式部領知仕置悪敷故、知行被召上御預になる子内蔵介に壹万石被下、扨会津の城にて二十三万石保科肥後守正之に被下也

一 同極月廿八日、下野国宇都宮にて十万石奥平大膳大夫家昌に被下、其子美作守忠昌代迄宇都宮にまかり有当将家綱公御代今主人死去に付追腹仕候ハ、一跡を御立被成ましきとの御法度出候刻美作守病死して其家来追腹仕候に付美作守跡を八御絶し被成、乍去奥平の家八御忠節之家にて候、俣大膳に八別而御知行被下との

被仰渡にて最上山形にて九万石被下山形に罷在候、松平
下総守八本領十五万石にて宇都宮を被下

一 今年、延暦寺へ三千石の山領を附られ太閤秀吉公の廟
豊国へも壹万石の社領を御付被成、扱板倉四郎右衛門勝重
加藤喜左衛門に京都の司職を被仰付 四郎右衛門後号伊賀守

一 慶長七年三月十七日、嶋津修理大夫義久法名龍白に大隅薩
摩兩國安堵の御朱印を被下

一 同年五月八日、佐竹右京大夫義宣か常陸八十万石の領地を被
召上羽州秋田砥沢にて二十万石被下常州水戸の城を武田
万千代信吉に被下候、是八万千代の母 落字方 氏なり下総国佐
倉より水戸へ被移なり、慶長八年九月廿一日、二十一歳にて信吉
死去なり

一 同年八月廿九日、母公逝去被成七十五歳、則号伝通院殿是八水野右衛門大夫正康娘下野守信元妹也

一 同九月、三州作手を松平下総守忠明に被下

一 同十月十八日、金吾中納言秀秋死去二十三歳 子無ユへ跡タユルナリ

一 同極月廿八日、嶋津又七郎忠恒伏見へ参上いたし御目見仕、忠恒をあらため家久と号す

一 慶長八年正月、甲州を義利へ被遣也、是八家康公御子尾張大納言義直と申たるの御事也、慶長十二年閏四月十六日、甲州より尾張へ被遣

一 同二月、備前を池田輝政に被下、輝政か子松平武蔵守利隆其子新太郎少将光政又其子伊豫守綱政に今至迄代々備前岡山に居城す

一 森右近大夫忠政信州河中嶋に罷在候処美作を被下、松平上総介忠輝の下総の佐倉を所地被成申を河中嶋を被下被遣候

一 二月十二日、家康公左大臣にならせ給ひ征夷大將軍に任せらる、是より將軍と申奉り御次男三河守秀康卿も參議に任らる

一 四月廿二日、秀頼公内大臣に任らる

一 七月廿八日、秀忠公の御息女を内大臣秀頼公へ嫁娶し給大久保相模守忠隣御輿に供奉す、秀頼公より八浅野左京大夫幸長を以御輿をむかへらるゝ也、大坂落去以後八本多中務大輔忠勝(刻方)に嫁し給、中務にて息女をもふけ此息女松平新太郎光政へ被遣候也、中務死去の後剃髮天樹

院殿と号す

一 十一月七日、秀忠公右近衛大将に任し給ふ、同日頼将へ水戸を被進是紀伊大納言頼宣と申の御事也、頼将を政頼と改又頼宣と改、慶長十四年極月、駿河遠州両国にて五十万石被進、其後紀伊国を被進て紀州大納言頼宣と申候

一 慶長九^甲辰七月十七日、大猷院殿家光公武州江戸の御城西丸にて御誕生也、御母八浅井備前守長政の娘也、則竹千代様と申秀忠公二十六の御としの御子なり

一 同年四月十二日、秀頼公右大臣に任らるゝ、家康公將軍を秀忠公へ御ゆつり被成同十六日

内大臣正二位征夷大將軍秀忠公

中納言

結城秀康卿

左中將

下野守忠吉

少將

上総介忠輝

一 慶長十一年五月十四日、榊原式部少輔康政死五十九歳、康政は大須賀五郎左衛門康高か聳也、五郎左衛門横須賀にて果申候時子なき故、孫なれは式部か子出羽守忠政を養子として大須賀を名乗せ候也、榊原家八次男遠江守康勝継也慶長十二年大須賀出羽守忠政死、忠政子を式部と号す、榊原遠江守か女八加藤肥後守忠廣か姉也、然とも此腹に子なし、慶長の末遠江守病死の時子なきよし上聞に達たる故、大須賀の跡式部を以て榊原の家を続け大須賀か家八絶る、遠江守下腹の子に平十郎と云あり、肥後守実の甥にはあらねとも為甥御目見仕る

肥後落去ノ後遁世也

- 一 同八月十一日、義利 尾張 右兵衛督 紀伊 常陸介に任す、九月、常州下妻を左衛門督頼房へ被進候、慶長十四年十一月に同国水戸の城に二十五万石を添被進候故、水戸中納言頼房卿と申候也
- 一 慶長十二年二月、下野守忠吉病氣に依て江戸へ被参大久保加賀守忠常か家に入、三月五日卒 二十八歳
- 一 同三月、天野三郎兵衛康景駿河原田の郷民をいたましむる事を井出勘介申上る故、三郎兵衛追放被成候
- 一 同閏四月八日、中納言秀康越前にて逝去 三十四歳
- 一 同七月三日、駿河府中の城へ公為移給ふ、此日江戸將軍より酒井右京太夫忠世 後号雅 楽頭ト 参上仕御悦申上る
- 一 同五月廿八日、犬山の城を平岩主計頭親吉に被下、親吉慶長十六年七月死 七十歳也

一 同十月四日、江戸御城にて源和子 国母号 東福門院 生させ給ふ、云伝に御

誕生の刻江戸中かんはしき香いたすと云 云

一 慶長十三年、筒井伊賀守定次治国の器量あらさる
よし中坊飛騨守申上るに付伊賀国を被召上、同八月
藤堂佐渡守高虎に伊賀国を被下

一 同十四年二月廿一日、嶋津家久公命を得て琉球国へ兵船
を出し大戦大嶋徳嶋所々にて戦、四月三日、中山王尚寧
をとらへ、八月六日、琉球王をつれて駿府へ罷下、八日に御
目見仕る

一 同四月四日、駿府御殿の庭に人有、手足の指なし弊
衣乱髪にして青蛙を喰来る所を問へ八天を指す諸人
ころさんと云、家康公聞召殺事なかれとて御城外へ

はなさるゝに行方なし

一 同五月十一日、松平伯耆守一忠卒す、始は中村一学と申候
継子なきゆへ一跡絶る

一 同七月七日、嶋津に琉球国を被下彼国を征する故也
一 同極月五日、大垣を石川主殿頭総輔に被下、家成か跡を
つかせらるゝ家成か子長門守康道に大垣を被下しか
慶長十二年七月廿七日に康道父に先立死去故、家成を大
垣に被置候処家成死去に依て外孫主殿を以其跡
を続けらるゝ

一 極月九日、有馬修理亮子息左衛門佐父子に被仰付長崎海
上に番船をつなひて置たるを破せられて水底にし
つむ

一 同十五年二月十七日、秀忠公蔵王寺に狩あそはし鹿二百四十七、猪二十三をとらせらるゝ

一 同閏二月二日、堀越後守か家老堀監物弟丹後守威勢をあらそい駿府に訴ふ、依之越後守忠俊を岩城へ御流し被成監物を最上へなかさるゝ、三日に越後を上総介忠輝へ被進なり

一 同七月十九日、伯州をわりさき加藤左衛門泰景・市橋下総守正綱・関長門守一政に被下、同廿七日に勢州龜山を松平下総守忠明にくたさるゝ

一 同十六年三月廿二日、新田大炊助義重に鎮守府將軍従四位下を贈らせ給ふ

一 同四月六日、浅野弾正長政卒す
六十五歳

一 同六月二十四日、加藤肥後守清正卒ス 五十歳也 從五位上侍從主計頭か事也、同八月廿四日、加藤虎之助忠広 後号肥後守從五位上侍從ニナル 父か遺跡を給る

一 同十一月、秀忠公鴻の巢に狩し給ふついでに源誉上人土井大炊頭利勝・成瀬隼人正正成を新田へつか八され大光院の地を取たてさせらるゝ

一 同十一月廿八日、越前少将忠直の臣本多伊豆守と今村掃部・清水丹後権威をあらそひ武府に訴ふひか事に依て清水八仙台へ今村八岩城へ流し被遣、本多八越前へ被帰国政を司る

一 同十八年極月、大御所狩し給ふ時馬場八郎左衛門と云者大久保相模守忠隣か事を訴ふ、公本多佐渡守正信を被遣て相模守か是非を問せらるゝに正信か繕にて相模守か科を被

宥京都へ上らせられて吉利支丹の宗旨を改させらるゝ
正月七日、大久保都へ至て邪法を禁し、廿日に罪を定む
一 同七月十九日、大久保石見守か子藤十郎外記を誅せらるゝ、是ハ
父石見守四月廿五日に死して後隠謀あらハるゝなり

一 同十九年二月二日、大久保相模守忠隣を江州へ流さる

私二曰大久保石見守病死ノ節反逆ノタクミアリツルヨシ沙汰アリ依之御穿鑿ノ時
石見守カ妻ニ張枕ヲアツケ我死ナラハヤキ捨ヘシト云ヲキタル事アラハレ其枕御
城へ上リ申候此枕ノ内ニ反逆ニ一味ノモノ書付同意ノ誓書アリシトノせつナリ此
剋此月安房里見忠吉モフル、ナリ大久保力聲ナルユヘナリ下野ノ佐野修理大夫政綱ツ
フル、也是八富田信濃守カ子ナリ佐野ノ家へ養子ニ行テ佐野ヲ名ノル佐野ノ家
ハ俵藤太秀卿ノ末流ニシテヲヒライジト云ヨロイツタハル此ヨロイハ竜宮ヨリ三井寺ノ
鐘ト一度ニ得タルヨロイノ由也今八下野国佐野ノイツルノ観音堂ニ納リ有ト云々佐野
吉之丞ハコノ孫ナリ

一 同年四月五日、駿河ノ海にて異魚をとるかたち八亀に
似て頭は大にして犬のことく背八黒く亀の甲のことし
尾三股にして大鱗おもさ二十人してもたしむ

御先祖記四卷終